審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　　佐々木 直

Ⅰ．研究の目的と背景

摂食障害（Eating disorders：以下 ED と略す）は通常、神経性食欲不振症（Anorexia Nervosa：以下 AN と略す）、神経性過食症（Bulimia Nervosa：以下 BN と略す）、特定不能の摂食障害（Eating Disorder Not Otherwise Specified：以下 ED-NOS と略す）に分類される。米国精神医学会の DSM－Ⅳの診断基準では、AN には制限型とむちゃ喰い／排出型（それぞれ AN-R、AN-BP と略す）、BN には排出型と非排出型（それぞれ BN-P、BN-NP と略す）いう下位分類がある。AN と BN は独立した臨床単位として位置づけられているが、体重や体型への過剰な関心、体重増加を防ぐための行動などの共通した臨床像があり、相互移行的な臨床形態であると考えられている。

ED の病因として、現在のところ十分な根拠のある単一の要因は見出されていない。さまざまな因子が複雑に関連していると考えられている。ED の病因論として、さまざまな理論があるが、その多くが実証的に検証されていない。近年、認知行動理論に基づいた認知行動療法が ED の治療に適用されることが多く、治療効果も優れている。認知行動理論では、歪んだ身体感覚と不適切な問題解決技法とともに、食物と体重に関する非機能的な認知が、ED の発展と維持に重要な役割を担っていると考えられている。しかし、このような非機能的認知が、どのように食行動異常に影響を与えているかは明らかになっていない。

そこで本研究では、9 種類の測定尺度などを用いて、どのような因子がどのように食行動異常に影響を与えるかを分析し、ED 患者における食行動異常に関する因果モデルを作成した。

Ⅱ．対象と方法

対象は、1997 年 1 月から 1999 年 1 月までに摂食障害治療の専門家が所属している大学病院、総合病院、診療所を初診した 250 名の ED 患者である。その内訳は、全員女性であり、AN-R：74 名、AN-BP：68 名、BN-P：76 名、BN-NP：20 名、ED-NOS：12 名であった。

方法は質問紙による調査である。調査に際して、本研究について十分な説明を行い、患者に理解・納得してもらい、同意を得た。質問紙セットは、本調査の簡単な趣旨説明と身長、体重などの質問からなるフェイスシートと以下の 9 種類の尺度から構成された。

統計解析に関しては、SAS インスティテュートジャパン社の統計解析ソフトウェア Windows 版 SAS バージョン 6.12 を用いた。連続変数に関しては、AN-R、AN-BP、BN-P、BN-NP、ED-NOS 5 群間の違いを分散分析によって検定した。有意な違いが認められた変数に関しては、さらに Tukey の多重比較を用いて、どの群間に有意差が認められるのかを検討した。相関分析に関しては、Pearson の積率相関係数を求めた。摂食障

害患者における食行動異常のモデルの作成に関しては、CALIS プロシジャを用いて、共分散構造分析により行った。潜在変数である構成概念としては、「社会的影響」、「セルフ・エスティーム」、「体型や食事に関する信念」、「ボディ・イメージの障害」、「ダイエット行動」、「むちゃ食い・排出行動」を想定して、「社会的影響」や「セルフ・エスティーム」が「体型や食事に関する信念」に影響を与え、その結果「ボディ・イメージの障害」が生じ、「ダイエット行動」や「むちゃ食い・排出行動」といった食行動異常につながるという仮説モデルの検討を行った。なお、本研究において、危険率５％未満を有意とした。

Ⅲ．結果

１．分散分析

AN-R 群が他の４群と比較して、有意に低い変数が多く認められた。また BN-P 群が他の４群と比較して、有意に高い変数が多く認められた。

２．相関分析

各変数間の相関係数は、全体的にかなり高かった。体型や食事に関する信念とダイエットやむちゃ食いなどの行動との関連性が示唆された。

３．摂食障害患者における食行動異常のモデルの作成

共分散構造分析によるモデル作成過程の途中で、患者数に比して変数が多かったため、観測変数を 11 項目に減らした。最終的なモデルの中の因果係数および影響指標はすべて有意であった。また、モデルとデータの適合度は十分高く、構成されたモデルは標本共分散構造行列をよく説明していると判断された。

本研究で作成された摂食障害患者における食行動異常に関する因果モデルの内容を以下に述べる。「ダイエット行動」を規定する要因は「体型や食事に関する信念」であった。「むちゃ食い・排出行動」を規定する要因は、「社会的影響」と「ボディ・イメージの障害」であった。「ボディ・イメージの障害」を規定する要因は「体型や食事に関する信念」であった。「体型や食事に関する信念」を規定する要因は、「社会的影響」と「セルフ・エスティーム」であった。「体型や食事に関する信念」は直接的に「ダイエット行動」に影響し、間接的に「むちゃ食い・排出行動」に影響していた。「社会的影響」は直接的に「むちゃ食い・排出行動」に影響し、間接的に「ダイエット行動」に影響していた。

以上、本論文では、摂食障害患者 250 名の調査結果から、共分散構造分析を用いて、摂食障害患者における食行動異常に関する因果モデルが作成された。本論文は、摂食障害の研究領域において、患者群を対象とした共分散構造分析を用いた初めての報告という点で独創性がある。さらに、これまで健常群と比較して ED に特徴的であることが実証されてきただけであった「体型や食事に関する信念」が、「社会的影響」と「セルフエスティーム」の影響を受け、直接的に「ダイエット行動」に影響を与え、間接的に「むちゃ食い・排出行動」に影響を与えることが示唆され、これらの信念を変容させることが ED の治療に有効であることが示されたという点で臨床的有用性が認められ、学位の授与に値するものと考えられる。